

新疆における漢語教育の現在

三 橋 秀 彦

新疆財經大學は、新疆ウイグル自治区（以下、新疆）の経済エリート養成校であると同時に、MHK（中国少数民族漢語水平等級試験）の新疆における拠点校でもある。MHKとは、文字通り少数民族のための漢語能力試験を意味し、中国の少数民族の若者たちは、進学・求職等、中国社会で生きてゆくためにあらゆる場面で、このMHKの資格が要求される。近年、日本でも広く知られるようになったHSK（漢語水平試験）が海外の中国語学習者に対する試験であるとするなら、MHKはHSKの少数民族版といつてよい。

新疆ウイグル自治区（以下、新疆）の首府ウルムチは、俗にユーラシア大陸の「へそ」と呼ばれる。「へそ」つまり中心、地理学的用語を使えば、到達不能極（Pole of inaccessibility）。ウルムチは海からの距離が二、六四五kmと、ユーラシア大陸の中でもっとも奥まった場所に位置しており、こうした地理的条件がユーラシア大陸の東側に築かれた漢語世界の影響を、これまで限られたものにしてきた。

近年、ユーラシア大陸の奥深くに位置する新疆でも漢語が急速に普及している。実際、二〇一一年に開始された第十二期五年計画では、全国の学前教育（日本の幼稚園教育に相当）の整備・普及に軌を合わせ、新疆でも民族語と漢語の二言語を使用する双語幼稚園

を整備し、少数民族の子供たちも幼稚園の段階で漢語学習を開始することが目指されている。言語学習の様相は、その地域のコミュニケーションのカタチ、ひいては人々の意識に深い影響を与える重要なテーマである。本稿ではそうした観点から、今日の新疆における漢語教育を歴史的に位置づけてみたい。

チュルク語の空間と イリミンスキー・システム

新疆には、新疆ウイグル自治区として自治区名称に入っているウイグル族の他に、数多くの民族が暮らしている。人口の多い順に、ウイグル族（四十六％）、漢族（三十九％）、回族（四％）、キルギス族（一％）、モンゴル族（一％）と続き、ウイグル・キルギス族はチュルク語系民族として、言語的には東はシベリアのヤクート語、西はトルコ語など、中央アジアの東西に広がる母語人口一億の人々にとっての祖地、歴史的、文化的にトルキスタンと呼ばれる空間で暮らしている。

帝政ロシアの時代、ロシアの東方拡大にともない、一八六〇年代、チュルク語系のタタール人に対して、ヴォルガ川上流の中心都市カザンを拠点に、母語とロシア語を使用した教育、すなわち今日の中国でいう

双語（二重言語）教育の実験が行われた。そのシステムの創始者こそが、ロシアの少数民族語教育の父として知られるニコライ・イリミンスキー（一八二二—一八九一）である。イリミンスキーが確立したシステムは、一八七〇年のロシアの「異教人教育規則」でも採用され、その後、トルキスタン総督府、ステップ総督府ではイリミンスキー・システムを採用した民族言語とロシア語を併用した教育が行われた。その結果、旧ソ連に属するチュルク語地域では、例えば、カザフスタンでは一八九七年、識字率にして七・五％（民族語六・一％、ロシア語一・四％）だったのが、その後、二十五・二％（一九二五）、八十三・六％（一九三九）、九十六・九％（一九五九）と識字率は急速に向上した。ウズベキスタンでも、三六％（一九七七）、六一・六％（一九二六）、七十八・七％（一九三九）、九十八・二％（一九五九）と同じ傾向が観察される（塩川伸明「ソ連言語政策史再考」）。民族文字・文章語の創造、民族言語のラテン・キリル文字表記、民族言語を使用した教育など、ロシア帝国、ソ連の少数民族言語政策は連続性が強く、現在、中国で実施されている双語教育の源流も、そこに起源している。

漢字世界の表音化 — ラテン化新文字とピンイン

世界の主要言語の中で、漢語は漢字という表意文字のみを書記言語とする点で特異な位置を占めている。アルファベットのような表音文字の場合、限られた基本文字を習得すれば、人々は日常生活で話している内容を容易に文字化できる。英語は二十六のラテン文字、ロシア語は三十三のキリル文字を人々が習得しさえすれば、庶民の日常生活に一挙

に文字が浸透する。漢語の場合、そうはゆかない。実際、中国では今日の少数民族に対する漢語教育の基本方針を示す「全日制民族小中学校漢語語文教学大綱」(一九八二)でも、初等・中等教育で二、五〇〇前後の漢字、六、〇〇〇語の常用語の習得を必要としている。日本の当用漢字が一、八五〇字であることから、中国人、特に漢語を母語としない少数民族が「中国人」らしく尊敬をもって生きてゆくには、漢字学習の負荷がいかに過酷なものであるかは容易に想像がつく。

中華人民共和国建国時の識字率は二〇—三〇%である。漢族であつても大多数の人々にとつて、つい六〇年前まで漢語は「話し、聞く」対象であつても、「読み、書く」ものではなかつた。中国にも日本の仮名のような書記世界と音声世界を媒介するものが必要だったのである。

ここで話を再び、中央アジアに戻そう。冒頭、紹介したイリミンスキー・システム型教授法は、ソ連になつても採用され、中央アジアでは、一九二八年にラテン文字(一九四〇年以降はキリル文字)によるアラビア文字の代替が急速に進んだ。同時に、教育の普及とあいまって一九二〇年代から三〇年代にかけて、民族語レベルでの識字率は急速に向上し、その結果、中央アジアの都市部では、生活文化のソ連化が進展した。他方で、同時期、ソ連領内には沿海州を中心に漢族という少数民族が存在し、その多くは文盲であつた。一九二八年、中国ソビエト科学調査研究所は、ソビエト領内の漢族のために、漢語表記のためにラテン文字を使用した「ラテン化新文字」を、当時のレニングラード(現サンクトペテルブルク)で考案した。当時モスクワにいた初期中国共産党の指導者瞿秋白た

ちがこれに改良を加え、それは魯迅・郭沫若などの左翼系知識人の共感を得て、日中戦争期、延安など中国共産党の根拠地での識字教育で広く使用されるようになった。この「ラテン化新文字」こそ、今日、世界中の中国語学習者が学習するピンインの起源である。

普通話から国家語へ

新疆は新疆ウイグル自治区の名称がしめすように高度の民族自治地域である。一九五四年に制定された中国民族自治区自治法でも、民族自治地域では、教育・行政・司法等あらゆる場所で、漢語と並んで民族言語の使用が義務付けられている。新疆の場合、高等教育では漢語が教学言語となるが、中等教育までは、民族語学校を整備し、民族語による教育が保障されてきた。新疆でも、旧ソ連の中央アジア国家のように民族文字のキリル文字化、漢族のようなラテン文字化の実験が五〇—七〇年代試みられたが、挫折し、今日でもアラビア文字を使用した民族語教育が実施されている。

こうした言語政策に変化がおき、本論の冒頭で紹介した漢語教育が義務化されたのは、二〇〇一年の国家通用言語文字法制定以降である。それ以来、漢語はそれまでの多民族国家中国の族際語(例えば、漢族とウイグル族、ウイグル族とモンゴル族)としての普通話から、中国公民が義務教育を通じて習得しなくてはならない国家語へと地位を高めた。MHK(中国少数民族漢語水平等級試験)では、高等教育機関で学ぶ少数民族の学生は3・4級受験が義務付けられている。ちなみに高等教育機関の教師にはMHK4級、初等教育でも3級が採用要件となつている。MHK4級は、日本の中国語学習者が受験

するHSKに換算すると、新HSKの5から6級に相当する。漢語世界の東西、日本・新疆で大学生達が同じレベルの中国語習得に取り組んでいる姿は、まさにグローバル社会の到来を象徴する今日の光景である。

一八六〇年代、ヴォルガ川上流の中心都市カザンに始まったタタール人に対する教育の試みは、激動の二〇世紀、国際関係の変容に翻弄されながらも、その後、サンクトペテルブルグ・延安を経て、時空を超え二〇一二年の日本そして新疆にまで続いている。

フィールドへの招待

ウルムチはユーラシア大陸の到達不能極、重心である。重心とは、質量を帯びた物質であれば、たとえそれがどんなに重く複雑なものであつても、最も効率的に支えられる点を意味する。中国・ロシアというユーラシア大陸の東西の二大大国にとつて、トルキスタンと呼ばれた新疆・中央アジア諸国のもつ地政学上の重要性は、この重心の例えからも容易に想像できよう。今日の中央アジアで起きている変動を理解しようとする場合、ウラル・アルタイ山脈というアジアとヨーロッパを分ってきた地理学的概念を、想像力逞しく縦横に超え往復するような柔軟な思考様式が求められる。その意味でも地域としての中央アジアを理解するためには、現実には根差すフィールド調査は欠かせない。ウラル・アルタイ山脈を跨いで暮すチュルク語の空間をより深く理解する上でも、同じウラル・アルタイ語族である日本人には、このアプローチが特に求められるのではないだろうか。

(国際関係学部 みつはしひでひこ)